

# らんの花

小川未明

青空文庫



(この話をした人は、べつに文章や、歌を作らないが、詩人でありました。)

支那人の出している小さい料理店へ、私は、たびたびいききました。その料理がうまかったためばかりでありません。また五目そばの量が多かったからでもありません。じつは、出してくれる支那茶の味が忘れられなかったからです。支那茶の味がいいってどんなによかったらうか。まず、その店で飲むよりほかに、私は、それと同じ茶を手に入れることができなかつたのです。

その味は、ちよつと言葉には現されませんが、味というよりも香いがよかつたのです。なんとというか、まだ、江南の春を知らないけれど、この茶をすするときに、夢のような風景を恍惚として想像するのでありました。

そして、頭の上の額には、支那の美人の絵が入っていました。美しい、なよやかな姿が、茶をすする瞬間には、さながらものをいうように、真紅な唇の動くのを覚えまし

た。

「君、このお茶の中には、香いのする花が入っているようだが。」と、ある日、私は、この店の主人に向かつて、ききました。

腰が低くて、愛想がよく、ここへ住むまでには、いろいろの経験<sup>けいけん</sup>を有<sup>ゆう</sup>したであろうと思<sup>おも</sup>われる主人<sup>しゅじん</sup>は、笑<sup>わら</sup>つて、

「このお茶には、蘭亭<sup>らんてい</sup>の白いらんの花<sup>はな</sup>が入<sup>はい</sup>つていますよ。」と、答<sup>こた</sup>えました。

「ははあ、らの花<sup>はな</sup>が入<sup>はい</sup>つている。なるほど、それで、こんなに、やさしい、いい薫<sup>かお</sup>りがあるのかな。」と、らの花<sup>はな</sup>のもつ、不思議<sup>ふしぎ</sup>な香<sup>かう</sup>気に、まったく魂<sup>たましい</sup>を酔<sup>よ</sup>わされたように感<sup>かん</sup>じたのでした。

偶然<sup>ぐうぜん</sup>のことから、私<sup>わたし</sup>は、らんに興<sup>きよう</sup>味<sup>み</sup>をもつようになりました。いままでは無<sup>む</sup>関<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>にこれを見ていて、ただ普通<sup>ふつう</sup>の草<sup>くさ</sup>の一種<sup>しゆ</sup>としか思<sup>おも</sup>われなかつたのが、特別<sup>とくべつ</sup>、高貴<sup>こうき</sup>なもののように思<sup>おも</sup>いはじめたのです。そしてすこし注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>すると、世間<sup>せけん</sup>ではいつからか、らなが流行<sup>りゆうこう</sup>していて、玩<sup>がん</sup>賞<sup>しょう</sup>されているのに気<sup>き</sup>づきました。デパートにもその陳列<sup>ちんれつ</sup>会<sup>かい</sup>があれば、とき公園<sup>こうえん</sup>にも開<sup>ひら</sup>かれるというふうで、私<sup>わたし</sup>は、いろいろの機<sup>き</sup>会<sup>かい</sup>に出<sup>で</sup>かけてい

て、らんを見ることを得ましたが、その種類の多いのにもまた驚かされたのです。たとえば南洋の蕃地に産する、華麗なちようのような花をつけたもの、離れ島の波浪が寄せらるがけの上に、ぶらさがっているという葉の短いもの、また台湾あたりの高山に自生するといふ糸のように葉の細いもの、もしくは、支那の奥地にあるという、きわめて葉の厚くて広いもの、そして、九州の辺りから、四国地方の山には、葉の長いものがありました。その中にも、変種があつて、葉の色の美しい稀品があります。花もまたいろいろで、一本の茎に、一つしか花の咲かないもの、一茎に群がって花の咲くもの、香気の高いもの、まったく香気のないもの、その色にしても、紫色のもの、淡紅色のもの、黄色のもの、それらの色の混じり合つたもの、いろいろでありました。しかし、まだ白い花を見なかつたのであります。これらのらんには、いずれも高価の札がついていました。

私はこれを見ながら、  
 「このお茶には、蘭亭の白いらんの花が入っています。」といった、この料理店の主人の言葉を思い出しました。白い花は、もつと珍しいものにちがいない。そして、もつ

と高価なものにちがいない。

「白い花があつたら、幾何するだらうか。」

こんなことも考えました。事実、金さえあれば、新高山の頂にあつたというらんも、この手に入るのですが、ここで私の考えたことは、自然の美というものが、はたして、金で買えるものであるかということでした。

これは、商人の場合ですが、こんな話があります。

どちらかといえば、私は、深くわかりもしないくせに、多趣味のほうです。あるとき、街を歩いていて、骨董屋の前を通つて、だれが描いたのか、静物の油絵がありました。立ち止まつてそれを見ているうちに、

「ちよつといいなあ。」と、いう気が起こつたのです。

もし高くなければ、買つてもいいというくらい気持ちで、その店へ入りました。

「いらつしやいまし。」と、老人が丁寧に頭を下げました。私はその油絵の前に近く寄つて、じつと見ていました。

ちようど、このとき、一人の男が、飛び込んできて、

「どれ、その根掛けというの。」「と行って、老人に向かつて、手を差し出しました。たがいに顔なじみの間柄である、商売仲間だとわかりました。

「これだね。」「と、老人は、そばにあつた小箱のひきだしから、布に包んだ、青い石の根掛けを出して、男に渡しました。男は、だまつて熱心に見ていましたが、

「なるほど、いいひすいだなあ。」「と、歎息をもらしました。

わたしほうせきはなし、私は寶石の話だけに、油絵から目を放して、そのほうに気を取られていたのです。

「どうだい、その色合いは、たまらないだろうね。」「と、老人は、さも喜ばしそうに笑いました。

「ごんな、いい石があるものかなあ。」「と、男が見とれていました。

「まつたく、そうだ。」「と、老人は、自慢らしく答えました。

「いくらなら手放すかな。」「

「いや、これは、楽しみに、持つていようよ。」「

「ふん、楽しみにか。」「と、男は、冷笑うように、いいました。

「いいものは、どうも売り惜しみがしてね。」「

「持つていて、どうなるもんでなし、もうかつたら、手放すもんだよ。さいわい、私には

見せる口があるのだ。」と、男は、なかなか老人に、渡そうとしませんでした。老人は、なんといつても笑っていて返事をしなかつたので、男は、ついに、それを返して、「じゃ、また出直してこようか。」と、いつて、しまいました。

なんとという深い青さでしょう。見ていると、玉の中から、雲がわいてきます。どの玉もみごとです。波濤の起こる、海が映ります。いったいこの美しい寶石をば、自分の髪の毛りとしたのは、どんな女かと空想されるのでした。

「いや、商売ですから、欲しいものでも金になれば手放しますが、生涯二度と手に入らないと思うものがありますよ。そんなときは損得をはなれて、別れがさびしいものです。なかなか金というものが憎らしくなりますよ。」と、老人は、初対面の客である、私にすら、つくづくと心境を物語ったのでした。この志があればこそ、骨董屋にもなったであろうが、この老人のいうごとく、美というものは、まったく金には関係のない存在であると思います。

話がすこし横道に入りました。また、らんにもどりますが、これは、らん屋で他の人が話をしているのを聞いたのでした。



大資産家なら知らず、そうでないものが、一万円のらんを求めるといふのは、よほどの好者ですね。それも全財産をただの一鉢のらんに換えたといふのですから、驚くじやありませんか。その人は、時計屋さんですが、金網の箱を造つて、その中に、らんを入れておいたといふのです。白い葉に、白い花といふ、珍品ですから無理もありません。ところが、時計屋さんは、仕事も手につかず、毎日、らんの前にすわつて、腕を組んで、「いいなあ、いいなあ。」といつては、考えていたといふが、とうとう憂鬱病にかかつて、なにを思つたか、らんを引き抜いて煎じて飲むと、自分で頸をくくつて、死んでしまつたそうです。

「いや、その気持ちがわかる。」と、一人がいました。

私が、この話をきいているうちに、神さまにしかわからないものを人間が知ろうとして見つめていたら、だれでも気が狂うだろうと思ひました。

だが、あの寶石のもつ美しい色や、花のもついい香いというものは、神さまにだけ支配されるものでしょうか？ たしかに、人間の心を喜ばせるものにちがいありません。しかし、それを人間が所有することはできぬものでしょうか？ なぜなら、人間が自然をすこしでも私しようとするときは、そこに、こうした思わぬ悲劇が生まれるからで

す。

ちようど、春先のことでした。友人を訪ねると、

「これは、故郷から送ってきた、らの花を漬けたのだが、飲んでみないか。」と、湯に入れて出してくれました。

「らの花?」

私は、茶わんの中をのぞくと、白いらんの花がぱつと開いて、忘れがたい薫りがしたのです。これを見た、私の胸はとどろきました。

「君、これは、どこのらんかね。」

「故郷の山にあるらんだよ。そこは、南傾斜の深い谷になっていて、らの花のたくさんあるところだ。嶮しいから、めつたに人がいれないが、春いくと、じつにいい香いがするそうだ。」

友だちは、らんについて、無関心のものごとくただ故郷の山の美しさを讃美して、きかせたのであります。

私<sup>わたし</sup>がその山<sup>やま</sup>へ、友<sup>とも</sup>だちにも告<sup>つ</sup>げずに、らんを探<sup>さが</sup>しにいったのは、すぐ後<sup>のち</sup>のことです。じ

つをいえば、矛盾と恥じますが、花の美にあこがれるよりは、一万円に値するらんを探すためだったのです。

山には、まだところどころに雪が残っていました。しかし五月の半ばでしたから、木々のこずえは、生気がみなぎって光沢を帯び、明るい感じがしました。谷には、雪があつて、わずかに底を流れる水の音がしたけれど、その音を聞くだけで、流れの姿は見えませんでした。そして雪の消えたがけには、ふきのとうが萌え、岩鏡の花が美しく咲いています。

峠に立つと山の奥にも山が重なり返っていました。それらの山々は、まだ冬の眠りから醒めずにいます。この辺は終日人の影を見ないところでした。ただ、友を呼ぶ、うぐいすの音がしました。かわらひわが鳴いていました。まれに、やまぼとの声がきこえてきます。

「ああ、いい薫りが……らんの香いだ！」

白い花の咲くらんのあるところへきたという喜びが、強く私を勇気づけました。しかしながら、このとき、白い雲が、谷を見下ろしながらいききました。

「花は、神さまに見せるために咲いているのだ。花を愛するなら、らんを取ってはいけない。」

私は、はつきりと雲の言葉を耳にきくことができました。けれど、私は、それに従わなかったのです。石から足を踏み外すと、谷底へ墜落して、左の手を折りました。この不具になった手をごらんください。そして、いまでも、思い出しますが、そのときの雲の姿がいかに神々しくて、光っていたか。人の思想も、なにかに原因するものか、以来、私は、地上の花よりは、大空をいく雲を愛するようになりました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「真理」

1936（昭和11）年6月

※表題は底本では、「らんの花《はな》」となっています。

※初出時の表題は「蘭の花」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# らの花

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>